

丈夫あつた、いろんな文句も見出した、達筆家もありがたかつた、御自慢のあつさりした水彩畫の肉筆賀状等はよろこばしかつた、がおのれは一番うれしかつたことはおのれの常々崇拜ぢやあ無い先輩先生として居る大下先生から戴いた賀状である、第一今年四十三年の一日から嬉しいことであつた。おのれは賀状を給つた先生へ厚く御禮申して居た。

思ひ出の儘

神奈川

加須美生

或る人曰ふ、「冬は色彩に乏しい」とそれは自然の觀察が不十分から出る言葉だらうと僕は思ふ、なぜなればさう云ふ人の寫生畫は、きつと色が單調で有らう、もし其の畫に種々の色が入つてゐれば、それは充分なる自然の觀察から出る色でなく、唯無意識に色を入れる丈で、自然がどうしても唯其時其畫が一寸キレイに手際善く描ければそれで善いと思つて居るに違ひない、少しく觀察を密にすれば、盛夏の濃い緑の中にも、其草特有の色が種々見えるに違ひない、わけて、秋は言迄もなく、冬の淋ひしい枯草の一樣に黄色に見ゆるも、つぶさに觀察したならば、乏しい處ではない、非常に面白い多くの色を見出す事が出来るだらうと思ふ、故に、いやしくも彩筆を手にする人々は、日常目に觸るゝもの何によらず心懸けて觀察して、其所謂審美眼を養成して置くことは急務であらう。

裏の竹藪

相模

枯村生

椽先から十間許りが畑で、それから先は四十五度位の勾配になつた草叢で、それが中頃から前は疎らに、奥の方へと段々に茂

つた竹藪である、家主が何時にも掃除しないので、竹の古葉が四五寸も積つて、前の枯芝の上迄一面に被さつて居る、毎朝八時頃になると前の畑の真中頃から藪へかけて、一面に日光を浴ひるので、畑に取残された菜でも藪の落葉でも皆んな白銀色にきら／＼して居る、草叢から藪へかけては丁度エロイオーカ

寫生

日比谷

T R

私は今同窓のMさんと目白の田舎道を歩ひて居るのだ、深く喰ひ込んだ車の跡にそふて行くと、一丁程で冬枯のした雑木林の方に行く、車の跡は雑木林の横から曲つて遠く下る阪道に續く、阪道の下は刈り取られた畠に續ひて遠く早稲田の方迄白く長く一線になつて居る、道の兩側には秋から未だ其生命をつないで居るイザケタ短い草が、葉の上に白くほ／＼りをのせて、百性の荷車から落ちた藁の間に、其青黒い短平な葉を見せて居る、二人は此道に別れて峠道にそつて土手の下へ出た、土手の下には瀛車の窓から、ほうり出された辨當のからが、其蓋と一間程離れて、土手の中途にある切株にひつかかつて居る、二人は土手の前の細徑に晝架を立てた、時々電車や瀛車が頭の上を氣味の悪

ひ音を立てながら通る、其度びに二人の頭は期せずして土手の上を見る、澄んだ中にも多少の薄黒みを混ぜた冬の空は、雑木林の上からズット頭の上迄限り無く續ひて居る。

「好ひ天氣だれ」不意にMさんが口を切る、畫面の半ばは、もう仕上げられてある、「うん」私は無意識に返事をしながら筆をどし／＼運ばせる、其間に雑木林の上に當つた空の色はヴェルミリオンを、ふくんでくる、と、思ふ間に頭の上の方もだんだん地平線の處から薄暗くなつて来る、今まで忘れて居た寒さが急におそつてくる。

五分の後には二人は鐵道の踏切を越えて學習院の前を通つた、窓と云ふ窓にはもう電燈の光が、パツとなつかしく、輝ひて居る。

### スケツチ箱と三脚の御供か(?)

韓國龍山 栗 本 生

余は昨年十二月二十七日當地を出發して日本へ飯省した、余は三十七年渡韓以來今度の飯省にて丁度四度だか、今度ほど愉快な旅行をしたことはない、聯絡船が門司につくともう何とも言はれぬ感じがする、今までは單に日本を見ると嬉しいばかりであつたが、今度は翠り滴たる森林コバルト色の遠山などは、恰かも一幅の畫を見るが如き快感を覺えた。

門司から瀛車に乗つて福岡に向ふ、線路の兩側にはまたブーカースグリン色の青菜が畑に残つて居る、草葺の家屋は竹藪或は雑林に圍繞せられて宛然スケツチの好位置を示して居る、朝鮮

では斯の様な藪や森林などは無論見ることが出来ない、瀟漠たる原野が赤黒色をしたる禿山ばかりで、見ると悲觀しても快感は起らぬ、松の綠色でも朝鮮の松は地勢と氣候の關係かも知らぬが何となく濁つて居る、日本の清らかだ、ヤハリ朝鮮の風物は亡國的である。

十二月三十一日に、友と打つて宿を出て、箱崎の海岸から名島の遠景をスケツチした、元旦の日は同じ場所から暴模様の激浪を試みか皆物にならなかつた、兎に角、日本の風物は今更ながら清らかな好畫題だと思ふた、韓國とは空の色まで違ふ、日本のは常に空などは暖色を帯びて居るが、こちらのは寒色を帯びて居る、日本に衣食することが出来たなら、常にコンな好き自然、清らかな風景に親しむこと出来て、少しは上手になるだらうと思ふと、朝鮮に衣食せればならぬ我身の不甲斐なさが自覺されて何となく淋しく之感ずる、福岡滞在中は、毎日雨か雪か風かで、天氣がわるく出かけられもせず、宿の二階からスケツチブツクを開いて、鉛筆で通行の人などを試みて居つた、佐賀武雄大分などへも旅行したが要事のみをして飛脚的であつたので、スケツチの違はなかつたが、スケツチ箱と三脚とは無二の道伴で始終身邊を離さなかつた。一月十九日、豫定より二日後れて無事に日本から歸えつて來た、停車場につくと三人の友と飼犬に迎えられた、手荷物皆友達に渡したが、三脚とスケツチ箱だけは自分で持つて我家へ歸つた。(終)